



殺される・・・！

絶対に殺される！

男は、アルコール中毒でもないのに手を震わせながら、ウィスキーを飲んで気分を落ち着かせようとしていた。

逃げられない・・・！ 逃げられるわけがないんだ・・・！

恐怖心から、汗が止まらず、しょっちゅうシャワーを浴びている。今日はまだ昼前だというのに五回は浴びていた。

ジリリリィィーーン！

「うわあ！」

まるで死の宣告をされたかのように、電話に驚いた。

ジリリリィィーーン！

「はあ、はあ」

なるべく呼吸を落ち着けようと、何度も深呼吸を繰り返す。

ジリリリィィーーン！

「わかった！ 今出るから！」

ガチャッ

「おらあ！ 遅えじゃねえか！ なめてんのか、ああっ！？」

「ひいっ！」

ヤクザの脅迫のような、ドスの効いた電話の声は、それだけで男をどん底に落とすのに十分だった。

「な、なあ、ああ、はあ、はあ、なんでしょか」

かろうじて声が出たものの、先ほどの深呼吸など全くの無意味となった。

「おい、いい加減にしようや、さっさとブツを渡せって言ってんだよ」

口調は落ち着いたが、相変わらずのドスの効いた声に、男はすっかり弱気になっていた。

「だ、だから、なんだよ、ブツって、俺はそんなもの——」

「惚けんじゃねえ！！」

「ひいっ！」

「こっちはもうとっくに知ってるんだよ、そこにブツがあるってことをな」

「そそそ、そんなことを言われても！ 本当になにも」

「そうかい、あくまでも白を切るつもりなんだな」

「そんな！」

「いいか、よく聞け。もしもあと一週間以内に渡さなかったら、今度は脅しじゃねえ、本物の殺し屋をそっちに送る」

「殺し屋！？」

「ああ、そうだ。これは脅しでもなんでもねえ。いい加減痺れ切れてんだよ。だからな、あと一週間だ。一週間以内に渡せ。じゃねえと本気で殺すぞ」

「わわわ、分かった！ 渡せばいいんだな！？ なんだ、金か？ 麻薬か？」

「馬鹿にしてんのか！！」

「すすす、すまん！」

「いいか、警察なんかには知らせやがったらただじゃおかねえからな。すぐに殺してやる！」

ブツッ！ ツー、ツー。

電話は一方的に切られた。

「・・・っくう！ なんだっていうんだ・・・！」

ブツってなんだ？ 金でもない、麻薬でもない・・・。他になにがある？ 持ち出してきたものなんか何にもないっていうのに。

「一週間で、一体どうすりゃいいっていうんだよ！」

ジリリリィィーーン！

「ひいっ！？」

今度はカエルのように飛び上がって、勢い余ってそのままドシン！ と床に落ちてしまった。

「あいたっ！」

ここは安アパートだ。あまり大きな音を立てると苦情が来る。今のドシン！ という音は確実に聞こえただろう。後で苦情がくるだろうなあ。いや、苦情がなんだ！ こっちは今殺されるかも知れないっていう状況なんだぞ！

小さいことは強気になれた。

ジリリリィィーーン！

相変わらず電話はしつこく鳴っている。

仕方ない、ここは覚悟を決めるしかない。ついでに金をよこせとか？ そしたら金なんかない！ と言ってやろうか。どうせこのままじゃ殺されるんだ。今度こそ強気でいってやる！

先ほどまでの恐怖はどこへやら、人間開き直ると強いものだと実感した。

「はい、金ですか？ そんなものありませんよ！？」

「なに言ってるんだ？ 酔ってるのか？」

酔ってるだと？ 確かにウィスキーは飲んでいるが・・・酔ってるかも。

「誰だ」

「俺だよ、樋口。今日は会社が休みなのに誰とも連絡がつかなくてさ、久しぶりにお前に会おうと思って電話したんだよ」

要するに最終手段ってところか。まあいいだろう、こんな気分だ、気分転換も必要だろう。

「いいよ、どこで待ち合わせ？」

「お前、今どこに住んでる？」

一瞬巻き込むのではないかとも思ったが、もしあの組織が狙っているんだとすれば俺だけを消すはずだ、問題はないだろう。

「ああ、今はN市にあるアパートに住んでる」

「ああ、そこなら会社に近いな。今から行って・・・十三時頃に着くと思うけど、いいか？」

「来てくれるならありがたい。いいよ、十三時だな、待ってる」

「おう、じゃあまたな」

電話を切ると、妙に落ち着いている自分に気づいた。

旧友と話すというのも、意外と落ち着くものだな。

「よう！ 久しぶり！」

「いらっしゃい、随分と久しぶりだな、何してた？」

「広告代理店で働いてるんだよ」

「どこの？」

「駅前にあるだろ？ 小ぢんまりとした旅行キャンペーンやってる」

「ああ！ あそこか、何度か見たよ。以前お世話になったこともある」

「本当か？ いつ？」

「去年の暮れだったかな」

まあ、その時はプライベートではなく、仕事で利用したのだが。

「ああ、その時は俺休みもらってたからな、いなかったのか」

「見かけた記憶はないからな、多分そうだろう」

もう少しキグシャクするかと思ったが、懐かしいということもあるのだろう。意外と話が弾んだ。

この樋口という奴とは高校以来の付き合いで、入学当時から昔仲間のように打ち解け、すぐに仲良くなった。それ以来なにをするにも一緒だったのだが、卒業してからは別々になった。

オールバックの黒髪に好奇心旺盛だとひと目で分かる大きく輝く目。性格も人懐っこく、よく慕われる人間といった感じだ。

「お前はなにしてたんだ？」

「俺はA社に勤めてたよ」

「A社！？ すげえな。あんないい会社にいたのか！ 勤めてたってことは——」

「ああ、辞めたんだよ。ちょっと嫌気がさしてな」

まあ、嘘はついてない。嫌気がさして辞めたのだから。

「マジかよ……。そうか、そっちでも色々あったんだな」

本当に色々あった——。いや、今も続いている。

「そうだ、そういえば俺この前面白い噂を聞いたんだよ」

「面白い噂？」

「ああ。仕事の関係で、色んなお客さんと話すんだけどよ、その時に聞いたんだ」

「なにを？」

「始末屋って知ってるか？」

男の心臓は一瞬飛び跳ねそうになった。

しかし、始末であって、殺し屋ではない。平然を装い「いや、知らないな」と答えた。

「まあ、そうだよな。知ってたらびっくりだ」

こっちがびっくりしたよ。と思わず言いそうになったのを必死で堪えた。

「で？ その始末屋って物騒なのがどうかしたのか？」

「そうそう、その始末屋ってのがな、ここの近くの山にいるらしいんだよ」

「山？ なんだそれ、修行でもしてるのか？」

どこかの漫画じゃあるまいし、どうせ都市伝説かなんかだろう。

「いや、表向きは山で喫茶店を営業してるらしい。名前は<喫茶葉月>」

「葉月？ 珍しい名前だな」

「食いつくところが違ುದろ。まあいいや、ここからなんだよ」

「なんだ、その始末屋とかいうのを探したのか？」

「ビンゴ！」

「マジか」

「大真面目だよ！ ここから十五kmほど北に行った山にあったんだよ！ <喫茶葉月>が！」

「おいおい、なにか依頼でもしてきたのか？」

「んなわけないだろう。確かに始末してほしい奴とかはゴマンといるけどよ、そんな裏の世界に頼ってまで殺したいとは思わないよ」

「それならいいが・・・ていうか、結局なにしてきたんだ？」

「お茶飲んできた」

「それだけ？」

「ああ。だが、あそこのウェイトレスが和服美人でな！ 金髪のポニーテールで目が青いんだよ。それが可愛いなのなの！」

「おいおい、女の子目当てかよ」

「まあ、それは行ったついでってやつだよ。本当に裏でそんな仕事しているのかは知らないし、誰が実際にその仕事する人かは知らないけど、表向き喫茶店やってるっていうんだから、単に喫茶店としてのお客でもいいだろ？」

「まあ、確かにそうだな」

「今度お前も連れてってやるよ、すごい美人だから！ ああ、そういえば男もいたなあ。カウンターに」

「いきなり冷めたな」

「男には基本的に興味ないからな。しかし！ あの男は出来ると見た！」

「はあ？」

「なんていうか、あの男からはオーラみたいな感じるんだよ。ああいう手合いはなんでも出来るタイプだぜ。家事から事務から雑務までスマートに無駄なくこなすってな」

「お前が男を褒めるとは珍しい」

「ははっ、俺も気に入った奴は素直に称賛するぜ」

「そいつはどんな奴なんだ？」

「そうだなあ、黒のショートで切れ長の目でメガネかけてたな」

「よく観察してるなあ」

「まあな。人間観察も趣味の一環だ」

えっへん。と胸を張る。別に偉いことではないんだが・・・。なんせこの樋口は多趣味で、確かに趣味の一環と言える。釣り、クレー射撃、野球、将棋、弓道、合気道と・・・。とにかく

多い。

「そいつが始末屋って奴なのかな」

「さあなあ、出来る奴だとは思うけど、そんな裏の仕事をやってるようには見えなかったな」

「そうか・・・」

始末屋・・・もしかして、そいつならこの厄介ごとを片付けてくれるのでは。その最後の希望は、確かに目の前に光を与えてくれた気がした。

「気になるか？」

「ん？ ああ、まあな。そんな非現実的な世界にいる奴が本当にいるなら、怖いもの見たさみたいな興味はわくさ」

「よっし！ 今から行ってみるか！」

「今からか？」

「車で行けば三十分ぐらいだろ、行こうぜ」

「まあ、確かにそうだけど」

「それに、夜遅くまでやってるっていうから、時間は気にしなくてもいいぜ」

そんなことを気にしてるわけじゃない！ しかし、樋口の前でそんなことは口が裂けてもいえない。好奇心に火がつくに決まってる。

「さて、じゃあ準備しようぜ」

その時、電話が鳴り響いた。

「全く、電話が鳴っただけであんなにびっくりするんだからこっちが驚いた」

「悪かったな」

先ほどの電話はただの勧誘電話だったが、思わずイラッときて「ふざけるな！」と叫んで切ったのだった。

「それより、もうすぐだぜ」

「あ？ ああ、例の喫茶店か」

車で揺られること二十分。山道に入っていた。

「本当にここなのか？ 山道だけど」

「ああ。なんか知らないけど、舗装はしないんだってよ」

「へえ」

少し前から山道に入ったのだが、揺れが大きく、車で行く道じゃないな。と思った。

五分ほど耐えると、ログハウスのような建物が見えてきた。

「あれか？」

「そう！ あれが<喫茶葉月>だよ！」

舗装はされていないが、駐車場は5台分確保されていた。

「えーと・・・。お、オープンになってるぜ、入ろう」

車を駐車場に止めると、店内に入る。

カラーンとベルが鳴ると、明るい笑顔のウェイトレスとバーテンダー(?)が迎えてくれた。

「いらっしゃいませ、二名さまですか？」

「はい」

「お好きな席にどうぞ」

テーブル席に着き、とりあえずメニューを見ると、意外と普通のメニューだった。

「おい、意外と普通のメニューだな。とか思ってないか？」

「え？ なんで分かった？」

「お前は顔に出るんだよ」

鏡がないから確認のしようがないが、恐らく見ても分からないだろう。

てっきりメニューとかに始末依頼の記入欄とかがあるのかと思ったが、漫画とかの読みすぎだろうか。

「なに頼む？」

「コーヒー」

「ここまで来てコーヒーかよ」

「お前はなに頼むんだ」

「俺はこのオススメ紅茶だね」

オススメを頼みたいだけじゃないのか？

「すみませーん」

「はーい」

噂の金髪美人が来た。なるほど、日本人離れした美人という感じだ。

「お決まりですか？」

「えーと、コーヒー一つとオススメ紅茶一つお願いします」

「はい、分かりました。コーヒーとオススメ紅茶ですね」

注文を受けると、ウェイトレスはカウンターにいる男に注文を伝えた。

「コーヒーとオススメ紅茶お願いしまーす」

樋口は注文がくるまでに行っておきたいと、トイレへ行った。

待っている間は特にすることもないので、メニューを眺めていたら、何故かウェイトレスがこちらに近寄ってきた。

「気があるのか・・・？ んなわけないか。」

「あのお」

「はい、なんでしょう？」

「本業の、依頼ですね？」

一瞬、心臓が止まるかと思った。

しかし、本業だからといって始末の話とは限らない。

「えーと、なんの話でしょう？」

「顔を見て分かりましたよ」

小悪魔のように、そのウェイトレスは微笑んだ。

「始末屋の依頼ですね」

コーヒーとオススメ紅茶を飲んだあと、俺は歩いて帰る。と伝えて、樋口とは喫茶店で別れた。

ウェイトレスに「残って下さればお話聞きますよ」と言われ、未だに半信半疑だが、確かめる他はなかった。なんせ忘れかけていたが、今俺は殺されるかも知れない状況にいるのだ。

喫茶店に戻ると、ウェイトレスが奥へ案内してくれた。

「喫茶店はまだ営業時間なので、主人の仕事部屋になります」

主人？ 男なのか？ まあ、始末屋っていうから、訓練された屈強な男ってイメージもあるが・・・。

「こちらです」

事前に話を通してあるらしい。「どうぞ」とすんなり通された。——ん？ 今の声・・・。

「失礼します」

ガチャッ

なんだこのドア・・・すごく重い・・・！

それでもドア如きにてこずるなんてかっこ悪すぎる・・・。

うおおおお！！

心の中で思いっきり叫びながらドアを開けた。

「ふふ」

ウェイトレスが笑ったのが気になったが、今はそんなことを考えてる場合じゃない。

「あなたが、依頼者ですか？」

やっぱりだ。イメージとは全く違う。まあ、イメージなんて所詮そんなもんだ。

背もたれの大きな椅子に座り、窓に向いているから、どんな人かは分からないが、声から明らかに女だと分かった。

「正確に言えば、相談したい・・・です。まだ、正式な依頼じゃないんです。すみません」

「別に謝る必要はありませんよ、相談したい・・・ということは、少なくとも始末したい対象がいる。ということですよ」

「まあ、はい・・・そうですね」

「とりあえず、事情をお話ください」

椅子が回転する。

ゆっくりと姿が見える。艶やかな黒のショートヘア、目は大きく、端正な顔立ちをしている可愛い女の子といった感じだ。まだ高校生のような印象も受ける。しかし、なによりも特徴がある——オッドアイ。

「私が、始末屋葉月家が現当主、葉月葉一です」

こんな子が・・・始末屋？

「こんな小娘で、驚きました？」

「あ、いえ！ そんな」

「いいんですよ、年齢もまだ大人ではありませんし、実際小娘ですから」

微笑む姿は、営業スマイルこそあれ、冷ややかな皮肉もなく、暖かい笑顔だった。

「では、そこにお座り下さい」

目の前に用意されていた椅子に座る。なんとも高価な椅子・・・と思いきや、意外と普通の椅子だった。そういえば彼女が座っている椅子も、社長椅子とかではなく、少し背もたれの大きい普通の椅子だった。

「まず、ご相談というのは？」

「あ、はい。それが——」

一瞬、目を奪われた。

先ほども見たが、彼女は左右の瞳の色が違うオッドアイだ。

彼女の場合、瞳の右が銀で、左が黒だった。

それがなんともキレイで、つい見とれてしまった。

「どうしました？・・・ああ、この目ですか」

「あ、すみません、そんなつもりは」

「大丈夫ですよ。初めてお会いする人たちは、最初不気味に思うそうですが、私は慣れてるせいもあってか、気に入っているんです」

「いえ、あの、不気味とかではなく・・・なんというか、あまりにキレイな瞳だったので見とれてました」

世辞でもなんでもない。しかし、こんなに率直にキザな感想を言えるとは・・・この葉月とかいう女の子の前では、それが普通だと思ってしまう。

こりゃあ、隠し事なんか出来そうにないな。

「ふふ、ありがとうございます。そう言われると嬉しいです」

本当にこの子が始末屋なのか……。こんなに笑顔の似合う可愛い女の子が……。恐らくだが、年齢で言えば、まだ高校生ぐらいのはずだ。

「眠そうですね」

「え？」

唐突な俺の質問に、一瞬唖然とする。

「あ、いえ。その、眠そうな半目状態なので、眠いのかと」

「ああ、これは昔からですねー。わざとこうしてるんですよ」

「わざと？」

「はい。まあ、理由は企業秘密ということで」

そんなのが企業秘密なのか？ と少し疑ったが、考えないことにした。

今は、そんなことを考えてる余裕はない。

改めて深呼吸をして、落ち着くと、本題を切り出した。

「実は、俺、殺されるかも知れないんです」

「殺される。とは、どういう理由で？」

「分からないんです。最近なんの前触れもなく脅迫電話が毎日のようにかかってきて、『ブツを返せ』と。俺にはなにがなんだかさっぱりで……」

「心当たりはないんですか？」

「はい。今日も電話がありまして、麻薬か？ 金か？ と言ったら『馬鹿にしてんのか！！』と怒鳴られまして」

「なるほど……。その男を始末するか迷っていると？」

「いえ、その男は多分組織の下っ端ですし、そんな奴を始末したところで終わらないのは分かってます。しかし、あと一週間以内にブツを渡さないと殺し屋を送る……と」

「なるほど……。確かに始末依頼ではありませんね。しかし、あなたは以前どこかの組織に所属していた。そして最近そこを抜けた。だからあなたはその組織に殺されるのではないか。ブツなんて言っておきながら実はそんなものはなくて、ただ殺すための理由付けで嘘であると、そう思っているんですね？」

心臓が止まったり飛び跳ねたりと今日は心臓が大変忙しかったが、今日一番の心臓に悪いものだった。

今すぐはち切れて死んでしまうのではないかと思うほどに心臓の鼓動が強く、速い。手を触れなくても楽に脈が計れてしまいそうだ。

「ななな、なあ、ああ、なぜ、分かったのですか？」

あまりの動揺に、平静を装うなんてとてもじゃないが無理な相談だった。

「あなたの言葉と状態、状況から推測しただけですよ」

そう言ってニコッと微笑んだ。

その笑顔は反則だ……。！

「ええ、その通りです」

「できれば、もっと詳しく・・・組織のことなども聞きたいんですが」

はあ、この子には負けるな・・・。

本人は気づいてない・・・というか、自然なことなのだろうが、仕草一つとっても可愛いし、なにより安心する。そういう雰囲気がある。多分依頼人が女でも、この子相手には素直になってしまっただろう。

期限一週間の依頼

「分かりました……。私は以前、Aという会社に勤めていました」

「あの大手企業の？」

「そうです。しかし、嫌気が差してやめたんですよ……」

少し、多分ほんの少しの……。一分にも満たないような時間だったのだろう。

それがなぜか、とても長く感じた。

「そのA社は、裏でなにをやっていたんですか？」

この子と話していると、寿命がいくつあっても足りない気がした。

「なぜ……。裏があると」

「さすがにそれはおかしいからですよ。あなたが勤めていたA社に対し嫌気がさして辞めた。というところまでは普通ですが、その後の脅迫電話がA社だとしたら、そんなことぐらいで脅迫する会社がおかしいことになる。しかし、その脅迫電話がA社を辞めた後に来て、あなたが不安がる理由は一つ。裏切り者としての始末」

やはり見抜かれていた。

そう、一番の理由はそれだ。

もしかして麻薬を持ってきてしまったのでは……。などを考え、家をひっくり返す勢いで探したが、何も見つからなかった。

考えられる理由はやはり一つ。勝手に抜けたことでの裏切り者としての始末。

表の世界ではそんなことはないが、裏の世界では抜けた者の情報が漏れることほど面倒なこともない。だから裏切り者は即刻始末するしかないのだ。もし戻りたいなどと言っても。余程のことがない限り叶わぬ夢のようなもの。結局は始末されてしまう。

「さすがですね。そうです。A社は裏で麻薬の密輸をやってるんですよ」

「麻薬ですか」

「そして、その裏事業に俺も使われました。名目は小麦粉の輸入。可笑しいでしょう？ そんな名目で輸入して、バレてないんですから。恐らくは警察関係者に圧力をかけられるほどの人物が幹部か上層部にいるんでしょう」

「なるほど、これであなたが殺されそうになっている理由が分かりました」

葉月は一旦区切り、今までにない始末屋としての目で、こちらを見据えた。

「お話をお聞きしたところ、始末するべき相手があまりに大雑把すぎて絞れません。どうしますか？」

「どうする……。というと」

「確定する要素がこれ以上出ないと、こちらとしても始末するべき対象が決められません。しかし、あなたがどうしてもこれを始末して欲しい。というのであれば、こちらで始末致します。

もちろん、我々の始末というのはただ消すものではありません。依頼人や我々が関与した事実や、その対象が存在していた事実をも消し去り、全てがリセットされるわけです」

「じゃあ、全て終わるわけか？」

少しずつ、希望が見えてきた――が。

「いえ、それで全てが終わるとは限りません」

「どういう・・・ことだ？」

「臭いの元を始末すれば、もう心配はありません。しかし、その臭いの元がはっきりしないまま、これを始末しろ。というのは、臭いものに蓋をするだけになるかも知れません。そうすると、もしもその蓋が壊れたり外れれば・・・」

「意味がなくなる・・・ということか」

「はい。その通りです。もしあなたがこれを始末してくれと依頼し、我々がそれを始末しても、それが今回の事件の本当の原因でない場合には、また繰り返される可能性があります。それでもよろしければ、あなたが指定する対象を始末致します」

このままでは、結局一週間後には確実に殺されてしまう・・・。それなら、例え一時的に蓋をするだけの処置になったとしても・・・。

「その間に本当の原因を究明する。ということはできないか？」

「結論から言えば可能です。とりあえずの原因を取り除き、その後で正確に原因を突き止めるのであれば、それはまた別の依頼ということになります」

「別料金ってわけか・・・」

「それか——」

葉月の目が妖しくきらめいた。

「殺される予定の一週間の間に原因を突き止める。という方法もありますよ」

結論から言えば、まず蓋をする。というプランにした。

その対象は、向こうからしつこく言われているブツだ。

彼女の評判などはもちろん聞いたことがないし、いくら可愛くて実力がありそうでも、一週間以内に原因を突き止めるという賭けに似たことはリスクがでかすぎると判断した。

可愛い余計か・・・。まあ、本当のことだが。

「さーて、どうしたものかな」

あの後は喫茶店にいた男——白というらしい——に送ってもらった。

そして、ついでだからということで、帰りにうちの書類やらビデオやら何もかもを片っ端から持って行ってしまった。なので、今あるのは冷蔵庫とテレビと電話と布団だけだ。

ちなみに電話はすでに盗聴器の有無を調べた上で、葉月家に会話内容を転送するための専用盗聴器のようなものを取り付けていった。便利な世の中だ。

こんな風に気楽にゴロゴロしてるのは久しぶりだなあ。

しかし、こんなに悠長にはしてられない。いつ電話が来るとも知れないのだ。

「もし電話が来た時には、できるだけ話を延ばして下さい」

と例の白という男に言われてるのだ。

逆探知でもするのかしら？ と思ったが、そんな機器のようなものは見当たらない。

ジリリリィィーーン！

いきなりの呼び出し音にびっくりしてまたもやカエルのように飛び跳ねてしまい、ドシン！と床に落ちてしまった。

落ち着け！出来るだけ話を延ばし、冷静に話すんだ。

呼吸と心臓を落ち着け受話器を取る。

「はい、もしもし」

「おう、俺だ・・・へへ、ちゃんと生きてるみたいだな」

生きてるみたいだな・・・って、あの後自殺したとでも思ったのか。

「今日は、なんの用ですか？」

「お？ 今日はいやに落ち着いてるじゃねえか、まさか警察がいるんで安心してるとじゃねえだろうな？」

「警察なんかいませんよ」

なんか誘拐犯との会話のようになっているような・・・。まあ警察は本当にいないから、嘘は一切ついてない。

「ふん、まあいい。で？ ブツを返す気になったか？」

「今探してるところだ」

「ほお？ じゃあやっとブツがあると認めたわけだな」

「認めてはいない。怪しいのがないかどうか確認してるだけだ」

「ふん、本当に落ち着いてやがるな。吹っ切れたか？ 開き直ったか？」

「両方かな」

「ははは！ そうかそうか、じゃあせいぜいがんばれや」

電話は切れた・・・。

俺が妙に落ち着いていたせいか、以前のような高圧的な態度はあまりなかった。いや、単に機嫌が良かっただけか・・・？

とにかく、出来る限り会話を長引かせたつもりだが・・・葉月のほうはどうだったか・・・。

まあ、今俺が考えてもしょうがないことか。

とりあえず買い物にでも出掛けよう。

よっこらせっと立ち上がった瞬間、パン！ という乾いた音と同時に頬に痛みが走り、フローリングが一部吹き飛んだ。

「なんだ！？」

一瞬頭が真っ白になった。

何が起きた？ 爆竹のような・・・いや、違うけどそんな感じの音が聞こえたと思ったら頬に痛みが。

手で頬を拭いてみると、そこには赤い血が付いていた。

「うわあ！」

撃たれたんだ！ 俺は今狙撃されたんだ！

その事実気づくまで大分かかった。その間に撃たれなかったのは奇跡と言えるのではないか。しかし、一週間だと言わなかったか？ それなのになんで殺されそうになってるんだ？

とにかく外へ出て、携帯電話で葉月の直通に電話した。

プルルルルルル・・・。

早く、早く出ろ！

プルルルルルル・・・。

くそっ！ 早く！ 早く！

気ばかりが焦る。どこを走っているのか分からない。どこに向かっているのかも分からない。

だが、今は走るしかない！

すると、目の前に一台の車が止まる。

「あ、ああ、あ、危ないじゃないか！！」

思わず叫ぶが、よく見るとその車・・・。

「早く乗って！」

例の白だった。

慌てて飛び乗ると、車はすぐに発進した。

「たた、た、助かった！ ありがとう！」

「お礼は生きて帰れたらにしてくださいね」

「え？」

理由は一瞬で理解できた。後ろから銃撃されたのだ。いや、そうだろうと思った。車で銃撃を受けたことなんかないから分かるわけがない。しかし、タタタタと音が断続的に聞こえるのは、やはり銃なのだろう。

「うわあああ！！ 殺される！ 死ぬううう！！」

「死にたくないなら、口を閉じてシートベルトをして下さい。舌を噛みますよ！」

「へ？」

言うが早いか、いきなりドリフトで交差点を曲がった。

「うわあああ！！」

車は大丈夫だが、五十km／時ほどでカーブするので、Gがけっこうかかる。

その後も五十km／時以上のスピードで曲がるので、次第に車も横転するのではないかと心配になってくるが、そんなこともなく。この白はきっとスーパードライバーに違いない、と確信した。

上手くまけたのか、追跡車はもうなかった。

「着きましたよ」

車が止まると、そこは<喫茶葉月>だった。

「災難でしたねー」

迎えてくれたのは、金髪美人の人だった。確か・・・金で名前だったか。

「災難どこじゃありませんよ・・・すみません、車ボロボロでしょう？」

「いえ、問題ありませんよ」

「なんで！？ あんなに銃撃受けたのに！」

「あれは特殊な防弾仕様になってまして、通常弾では傷も付きません。それに走行中でしたし、少し塗装が剥げた程度でしたね」

なんでそんな車を持ってるんだよ・・・。

「ところで、葉一さまは？」

「今、例の人と確認中」

「そうか・・・やはりまだなにかありそうですね」

「なにかって？」

「つい先ほど、怪しい書類を発見したので、あなたに知らせようとしたのですが、電話が繋がらないので私が様子を見に行っただですよ」

「それであのタイミングだったわけか」

「ええ。そういうことです」

「それで、その書類ってのは、なにが書いてあったんだ？」

「詳しくは暗号化されていて分かっていないんですが、なにかの輸入に関して。というものらしいです」

「まさか！ 組織の麻薬！？」

「分かりません。しかし、麻薬の線は薄くなりました」

「なんで？」

「今回の狙撃は、例の脅迫している組織の者ではない可能性が高いということです」

「じゃあ、一体誰だっというんだ？」

「それは現在調査中です。とりあえず中へ。ここは安全ですから」

今はそれを信じるしかなかった。

今日は念のために店じまいをするとのことで、看板はクローズになった。

中に入ると、あの始末屋の少女、葉月葉一がいた。

「うーん」 このケーキは絶品だね。ぜひうちで販売したいよ」

「ですよねー！ このケーキは稀に見る傑作ですよ～」

あれ？ 俺、今とってもシリアスなシーンにいた気がするんだけどな・・・。

「あ、葉一さま、依頼者さまが到着しましたよ」

さっき出迎えた時に言わなかったのか？

「いらっしやいませー、一緒に食べませんか？」

ケーキを食べて幸せそうにしてる葉一は、相変わらずの眠そうな半目ではあったが、やはり可愛かった。

いかんいかん！ 今はそれどころじゃないんだ！

「ていうか、なにかを確認してたんじゃなかったのか？」

「さっき終わりました」

ケーキを食べ終わり、ナプキンで口を拭くと、こっちへ向いた。

「例のブツの件ですが、白から聞いたと思いますが、恐らく書類だと思われます。内容については暗号化されているので、どういう内容かはまだはっきりとはしていません」

「そうか・・・」

ここに来て安心したのか、少し落ち着いた。

「俺・・・ついさっきの出来事がすごく長く感じた・・・」

「出来事？」

「ライフルによる狙撃と、追跡車両による銃撃です」

答えづらিদらうと思ったのか、白が代わりに答えてくれた。

「俺、本当に死ぬかと思った・・・。殺されると思った・・・。あんな非現実的な現実を突きつけられて、ようやく俺が関わっていた裏の本当の世界が見えた気がする。あんな会社だけど、俺は守られていた。いや、あいつらが自分の身を守ろうとしたら、偶然俺も守っただけなのかも知れないけど、数年間いて、あんな死の恐怖に直面したのは初めてだった」

殺されるかも知れないという昨日の自分はなんて甘えていたんだろうと思った。

こんなに死を間近に感じたことは人生で初めてだ。これが、本当の恐怖・・・。

「ニャー」

またもや、緊迫した空気に似合わない声がした。

「俺が真剣に話してるって時にあんたらは！」

「ニャー」

「だからなんで——！ あれ？」

足元を見ると、真っ白な猫がいた。

「猫・・・？」

「この子、昨日うちに来たんだよ」

「え？ 拾ったのか？」

「違うよ」

失礼しちゃうねーと、猫を撫でる。

「昨日買ったんだよ。飼いたくなってね」

「そうか・・・」

だからって、猫が解決してくれれば苦労はないんだが・・・。

「ニャー」

葉月の手を離れ、俺の足元に来た。

「どうした？」

無意識に猫を抱く。人懐っこいのか、抱かれても嫌がらず、ゴロゴロと喉を鳴らしてくつろいだ。

「あら、気に入ったのかな？」

事件の辛さを忘れさせようとしているかのように、優しく手を舐めてくれた。ザラザラしてるのはしょうがない。猫の舌はザラついているのだ。

「この猫、名前は？」

「実はまだ決まってないの」

「そうか・・・」

「そうだ、あなたが名付け親になってくれない？」

「俺が？」

「そう、私たちじゃなかなか決まらなくて、それにあなた、以前猫を飼ったことあるでしょ」

「なんで分かった？」

「猫を抱く自然な動作や撫で方、とても猫に触れたことがないと、さっと出来ることではないと思うよ」

「本当に洞察力と観察力がすごいな」

「ありがとう、褒めてもなにも出ないよ？」

やはり、この笑顔は反則だ。

「名前か・・・銀ってのはどうだ？」

「銀？」

意表を突かれたのか、ハトが豆鉄砲食らったような顔をする。

「この子、もう家族なんだろ？」

「うん、そうだけど」

「そっちの金髪美人は金で、そっちの執事みたいな奴が白だろ。だから、銀。毛は白いけどな。葉月の左目もキレイな銀だしな」

「そうかぁ・・・銀か」

一瞬複雑な顔をしたが、何度も銀と呟きながら猫を撫でた。

今日からはこの葉月宅にお世話になることになった。

俺は帰ると言ったが、今の状況で帰るのは自殺行為だと葉月に言われ、渋々残った。

どうやら俺はとことん葉月に弱いらしい。

「手伝いはしなくていいのか？」

世話になるなら、いっそ喫茶の手伝いをもと思ったが、今日の分の仕込みやら薪の準備は終わったので、手伝わなくていい。というより、手伝うことがないらしい。

「じゃあ注文取るとか」

「あなたは今狙われてる身なの。そんな人がいる時はお客さんでも信用せず常に注意を払ってないといけない。私にそんな苦勞までさせるつもり？」

それもそうだと、やはり納得して大人しく部屋にいることにした。

ここは喫茶店と自宅が同じだが、分離されていて、一軒家に店をくっつけた形になっている。自宅の二階が使われていないというので、二階を使わせてもらうことになった。

なにもすることがないので、本でも読んでみるか。

しかし、読もうとすると、すごく読みづらい。

「目が悪くなったか？」

しかし周りをよく見てみれば、外は夕陽が落ちる頃だった。

「もうこんな時間か」

色々あったせいか、時が過ぎるのがとても早い気がする。

「脅迫電話がきて、旧友と再会して、裏業者に依頼して、殺されかけて……。もう一生分の苦勞をした感じだ」

だが、まだ終わってない。これからが本番といってもいい。

それにしても、俺が手伝えることはないのか？ あるわけないか……。むしろ仕事の邪魔になりそうだしな。葉月なら上手くやってくれるだろう。

いつの間にか、葉月葉一を信頼している自分に、今更気づいた。

「そういや、腹減ったな」

もう夕飯時だった。確か居間に用意されていると言ってたな。

下に下りると、確かに居間に夕食が用意されていた。

「私たちの分はまた別に作る予定なので、用意してあるのは全部食べていいですよ」

金はそう言ったが、全部食べるのは悪いしなあ……。なんて思ってたら冗談じゃない。

「なんだ、この量は」

この家には大食いがいるのか？

どうみても一人で食べる量じゃない。一皿が三人前ほどある。それがざっと七皿だ。それが載るテーブルもすごい……。

「こんなの、一人で食べきれない量じゃないだろ」

文句なのか感心してるのか、自分でもよく分からないまま椅子に座る。

「……。いただきます」

とりあえず全ての料理を食べてみたが、全てプロ並みに美味かった。

「く、食いすぎた・・・」

あまりに美味しいので、残すのはもったいないと食べていたら、さすがに無理があったらしい

。

「だが、全部食えるとは思わなかったな」

「本当だ、全部食べれたんだ」

「しかし、ここにはこんな量を平気で食える奴がいるのか？」

「うん。金がけっこうな大食いでね。いつも多めに作ってるの」

「そうか、あの金髪美人意外と大食いなのか」

「金は美人なんだ、じゃあ私は？」

「葉月は可愛いな。つい見惚れてしまう」

「へー、嬉しいな」

あれ？

「は、は、は、は！」

「は？ 歯？」

「葉月！？ いつの間に！？」

「ついさっきから」

「店はどうした！？」

「十一時までの営業だから、まだやってるよ」

「そうじゃなくて、もしかして金と白だけでやってるのか！？」

「うん。正直あの二人で十分なんだよ。私は気ままに店に出る感じ」

「よくそんないい加減で店主が務まるな」

「今はあの二人がいるからねえ。昔は一日中お店にいたよ」

「あの二人はアルバイトかなにかか？」

「違うよ、立派な身内」

「親戚か？」

「うーん、まあ、似たようなものだね」

「複雑なんだな」

「そうだよ。家族なんてそんなものでしょ」

家族・・・か。

「両親はどうしたんだ？」

「深入りするねえ。両親は死んじゃった。って言ったらどうするの？」

「うっ・・・それはその、悪い」

「ははは、面白い人だね。母さんは知らないんだよ。父さんはちょっと生死不明だね」

「そうか・・・。大変、だな」

「ありがとう、もう慣れたけどね」

確かに、普段の葉月からはそんな悲しみの影というようなものは見えない。だが、まだ高校生

ぐらいの歳だ、寂しくないことはないだろう。

「それに、今は金と白がいる」

「そう、だな」

そうだ、この歳で両親がいないことの悲しみや寂しさは拭いきれなくても、支えてくれる人がいるのは、幸せなことなのだろう。

「あ、もうこんな時間か、ちょっとお店に行ってくるね」

「ああ、分かった」

時計を見ると、もう夜9時近かった。

「あと三時間で閉店か・・・」

とりあえずすることもないので、食器を洗うため勝手にキッチンを借りることにした。

「おお、ここはイメージ通りなんだな」

キッチンはしっかり整理されていて、とてもすっきりしていた。食器洗い乾燥機まで完備されていた。

「食洗機か、いかにも葉月らしいな」

葉月がいたら、なにが？ と言われそうだが、面倒な感じが出てるとはさすがに言えない。何十年も付き合いがあるわけじゃない、つい昨日知り合ったばかりでそれは失礼だ。

「いや、それを言ったら失礼な数々が思い浮かぶな」

思えば、あの夜に話した時は歳相応ではなく、なんかこう思わず畏怖したが、それからそんなこともなくほぼ対等に話している。

「最初は雲の上のような奴だったからなあ。本物の裏の業者だし」

だが、今ではただの少女として接している。不思議なものだ。仕事の話をする時は別人だが。やはり苦勞が絶えないのだろう。ただでさえ裏の世界は厳しい。下っ端の俺ですらそう感じたのだ、本来なら少女が踏み込む世界ではない。

「よし、完了」

一人暮らしが長いせいか、こういった家事仕事は手馴れている。考え事をしたり独り言を言っているとあっという間だ。

あれ？ 今更気付いたが、そういえば俺も下っ端とはいえ裏の業者だったんだよな・・・？

「へえ、家事お上手なんですか？」

「まあな。一人暮らしが長いと自然に身につく」

「助かります、ありがとうございます」

「いえいえ」

独り言のつもりだったから、気付いた時にはため息をついた。

「いつからそこに？」

「ついさっきです」

気がつけばもう夜も十一時になる。

自分の皿を洗っただけの気がするが・・・。いつの間にか居間で考え事をしていたらしい。

「戻ってきたらお皿が全部キレイになってましたから、びっくりしました」

「勝手にキッチン使って、悪かった」

「いえいえ、問題ありません。葉一さまから聞きましたよ？ 全部食べて下さったんですね！」

「ああ、残したら悪いなあと思ったら、予想以上に美味かったもので。少し食べすぎた」

「ありがとうございます」

この子も、笑顔を絶やさないよな。

よく見れば、日本人離れした美しさと言えるが、年齢は葉月とあまり変わらないだろう。そのぐらい若々しく見えた。

「本当に——！」

何を言おうとしたんだ俺は！

本当に、葉月の親戚、身内なのか？

それを聞いてどうする。本当に身内なら更に失礼なだけだ。

「？ どうしました？」

「・・・・・・・・」

俺は、俺の現実で闘わなければいけないんだ。葉月に構ってる余裕は、ない。

「あの酢豚、味付けが独特だったが、香辛料が違うのか？」

「そうなんですよお！」

料理好きなのか、料理の話に目が輝いた。

「あの酢豚にはちょっと工夫してありましてね——って、あなたもお料理好きなんですか？」

「ああ、食うのも作るのもな」

「依頼人さまと料理の話が出来るとは思いませんでしたあ」では続きいいですか？」

「ああ、お願いしますよ」

始末屋という闇

朝、目が覚めると三人の姿が見えなかった。

「食材とかを調達に行ってくるから、明日はゆっくりしてて、うちにあるものを適当に食べててもいいけど、外には絶対行かないこと。それさえ守ってくれば、後は心配ないよ」

昨夜はそう言ったのを覚えている。

「うーん、ゆっくりなあ」

殺し屋と謎の組織に狙われている・・・なんて実感がわかなくなった。

ここにいるからというのもあるが、やはり葉月が上手くやってくれているからだろう。

そういえばあの書類はどうなったんだろうか。まあ、解読しなければ本当に始末するべきものかも分からないだろうし、時間はかかるんだろう。それにしても組織が動かないのは何故だ？それともここが特定できないだけか・・・。

「ここは安全ですから」

白は確かにそう言っていた。それはやはり、全ての状況から判断した上での断言なのだろう。でなければとっくに見つかっているはずだ。

というか、目を覚ましたのが朝の八時。ゆっくりしてて、という言葉や、適当に食べてて、という言葉から判断するに、今日は夕方まで戻らないということなのだろうか。

ということは、それまで俺だけで過ごせということか。なんてこった、まだこの原稿かなりページが余ってるというのに・・・。

とりあえず居間に行くことにした。下にはソファもあったしテレビもあった。一日過ごすには十分だろう。

テレビをつけると、丁度ニュースをやっていた。

「ではここで臨時ニュースです。大手企業のA社が、本日倒産しました。詳しいことは情報が入り次第お伝え致します」

ニュースはそのまま国会議員の汚職について報じていた。

・・・・・・・・・・。

理解が出来ずに、頭が真っ白になった。

これまで色々と経験したが、今度は一番ぶっ飛んでいた。

倒産した？ あの、あの大不況にも屈しなかったA社が・・・？

あまり良いとは言えない脳をフル回転させて様々なシミュレーションを行ったが、どう考えても倒産するような事態になり得ない。というか、あの大企業が倒産したとなったら従業員は一気に失業、雇用問題にも発展するぞ。

プルルルル

その時、電話が鳴った。

「電話・・・どうすればいいんだ？」

自宅のようなベルではないせいか、あれほど怖かった電話が全然怖く感じなかった。A社が倒産したことによる安心感もあるのだろうか。もうこれで狙われずに済む。

プルルルル

何故かは分からないが、電話を取ったほうがいいと直感した。

「はい、もしもし」

「私です、葉月です」

最早聞き慣れた声に安心した。

「葉月か、どうした？」

「電話に出てくれて良かった。今ニュース見てましたか？」

「ああ、A社が倒産したっていう・・・」

「その電話は盗聴されてないはずですが、手短に言います。A社は倒産しましたが、まだそこにいてください」

「状況はどうなってるんだ？」

「すみませんが、まだ詳しいことは・・・。ただ、そこは絶対に安全です。信じて待っていて下さい」

もう、俺には迷いはない。ただ、葉月を信じることにした。

「分かった。だが、俺からも頼みがある」

「なんでしょう？」

「絶対に、生きて戻ってきてくれ」

電話の向こうから、ふふふ、と笑い声が聞こえた。

「分かりました。大丈夫ですよ、だって、食材の買出しですから」

それでは。と、電話は切れた。

もし、金や白からの電話なら、素直に分かったと言えただろうか。ふと、そんな疑問が浮かんだ。

しかし、始末屋という裏業者に依頼して、世話になっているというのに・・・なんというか、ハードボイルドみたいな緊張感の欠片もない。まあ、そもそもそんなもの最初からないが。

ただ、今は葉月たちの帰りが待ち遠しかった。

午後三時ぐらいに、葉月たちは帰ってきた。

「意外と早かったな」

「そうですか？」

「てっきり夕方になると思って、今夕食の準備をしていたところだ」

「え？ 私たちの分もですか？」

「ああ。あ！ 逆に迷惑だったか？」

三人は一瞬、呆気に取られていたが、笑顔になった。

「いえ、全然。むしろありがとうございます」

葉月が頭を下げて礼を言ってるのを見て、思わず止めようと思ったが、金と白も同様にするので、頭をかきながら「別にいいって、これくらい」と気恥ずかしく言った。

「それで、なにを作ってたんですか？」

真っ先に訊いてきたのは金だった。

「ああ、鶏肉とかあったから鍋物にしようと思ったが、大食いも二人もいるからな。ありったけの食材を使って出来る限り多く、豪華な料理にしてみようと思う」

「二人、ですか？」

「ああ、俺もけっこういけるみたいだ。金の料理が美味くてな」

「じゃあ、午後のお茶にして、それからお料理の続きにしましょうか」

葉月の提案に、全員一致で賛成した。

「え、じゃああの殺し屋ってもういないのか？」

「はい。白が懲らしめましたから」

あの時、狙撃の一回目が失敗し、しばらくボーッと放心状態にあったのに助かったのも、遅れて白と合流したのも、白が殺し屋を倒してくれてたおかげだったのか。

「ということは、もしかして・・・始末したのか？ 殺し屋を」

「いえ。白は始末してないはずですよ」

「なんで？」

「よく誤解されますが、始末屋というのはなんでも始末するわけではありません」

誤解されることによる不満に聞こえるが、葉月の言葉はとても優しくかった。

「私たちが始末するのは原則依頼者から指定された対象だけです。それ以外は余程の事情がない限り、殺生も始末も厳禁なんです」

「それじゃあ、見られたらどうするんだ？」

「色々方法はありますが、よくやるのは記憶を飛ばしたり、姿を見られる前に眠らせるとかですね」

「へえ、意外と地味なんだな。じゃあ一番良いのは誰にも見られない。ってということか？」

「そうですね、誰にも見られず知られず、対象を始末することが出来れば、それが一番です」

「ふーん。そうか。いくら裏の人間といっても、誰もが派手にハードボイルドにやってるわけじゃないんだな」

「ふふ、それは漫画の読みすぎですよ」

「やっぱりそう思うか？」

こんな話をしながらも流れるように料理の作業は続く。これはやはり慣れか。

「でも、極論を言ってしまうえば、私たちがいない世界が一番なんですよ」

「葉月がいない世界！？」

「ふふ、勘違いしてませんか？ 私たちっていうのは始末屋のことですよ」

「ああ、なんだ始末屋か。びっくりした」

「本当に面白い人ですね」

笑われて悪い気がしないのは葉月が初めてだった。

「私たちは例え対象がなんであろうと、始末するのが仕事です。それは『存在してはならない』から、もしくは『消えてほしい、消したいから』です。存在してはならないというのは、たいていが機密情報などですね。こういった依頼はいいんですが、特に消えてほしい、消したいというのは、そんな情報なんかじゃないんです」

何を言いたいのかは痛いほど分かった。だが、ここで「そんな仕事やめろよ！ もっと普通の女の子として生きろ！」なんて言うことはできない。それは、彼女を傷つけるだけではなく、彼女を否定してしまうからだ。

葉月はこの仕事を無理矢理やらされてるのではない。と以前白から聞かされたことがある。「葉一さまにはご内密に」と言われているので言わないが、どうやら自らこの仕事を受け継いだらしい。詳しい事情は聞かなかったが、なんらかの決意があるようだ。きっと俺には理解できない何かがある、そこにあるような気がする。

白には、踏み切った質問もしたことがある。さすがに葉月には訊けない質問。

「葉月は、人を・・・始末したことがあるのか？」

「それを聞いて、どうするおつもりですか？」

「どうするって、別にどうもしないが」

「興味本位の浅はかな質問であれば、控えていただきたい。葉一さまや、この始末屋という仕事の闇は、あなたが思っている以上に深い。もしもそこまで足を踏み入りたいと本気で思うならば、葉一さまと一生共に生きていく。それぐらいの覚悟で訊いて下さい」

その覚悟は、当然なかった。

ただでさえ脅迫電話にすら怯えていた男だ、俺は。

そんな俺が、葉月を理解し、この闇に身を投じて共に生きるほどの決意が出来るわけがない。

今回の俺の依頼だって、俺が見てないところでかなりの苦労があったはずだ。

最初の依頼はブツの始末だけだったのに、いつの間にかあれほどの会社相手に、更には別の組織だって出てきたらしい。その二つの組織を相手に事態を収拾してしまったのだ。

まだ何も言われてないが、俺にも理解できた。

葉月は、A社を始末したのだ。

「ところで葉月、一つ訊いていいか？」

「ん？ なに？」

「お前の部屋のドア、なんであんなに重いんだ？」

「ああ、あれね。防弾仕様の特注ドアなんだよ」

「通りで重いわけだ・・・」

「そりゃあ、そのまま開ければ重いよねえ」

「そのままって・・・どういう意味だ？」

「あのドアは、普段開ける時は補助装置を使うんだよ」

「補助装置？」

「あのドアの取っ手にボタンがあって、普段はそれを押しながら開けるんだよ。普通に開けたんじゃ重過ぎるからね」

「ちょっと待て、俺はそんな説明一つも受けてないぞ」

「そりゃそうだよ。金が説明しようとする前にがんばるから、金も黙って応援してたんだって」
なるほど、それであの時金は笑ったんだな。

「強引に開けて、悪いことしたな。無理矢理やったが・・・壊れてないか？」

「それぐらいで壊れるようなものじゃないから、大丈夫だよ」

「しかし、そこらじゅう防弾仕様なんだな・・・」

「なにかあったら大変だからね」

「あの車、どのぐらいかかっているんだ？」

「お金？」

「ああ」

「うーん・・・」

詳しく分からないなあ。と言いながら考え、ふと思い出したように答えた。

「全部含めれば、多分五千万ぐらいかな」

始末屋って、儲かるのか・・・。

「はい、準備出来たよー」

料理の途中だったので、折角だからと買ってきた食材も合わせ、バーベキューにすることになった。

「うん、美味そうだ」

「皆が愛情込めて作ったからね、不味いはずがないよ」

「そうですよお、今日は始末依頼完遂祝いなんですから！」

「どんどん食べて下さい」

白は大食いではなく普通なので、食べながら焼いていた。

「では、ここで改めて俺から言わせてくれ」

一端作業を中止して、三人がこっちを一斉に向くものだから、何故か気恥ずかしくなった。

「あー、ゴホン！ 先ずは葉月、金、白、今回は本当にありがとう」

「いえいえ」

葉月はいつものように微笑んだ。

「俺の弱い心から始まって、あんな大企業が絡んだ大きな事件に発展してしまったのに、素早く対応してたったの三日で全てを終わらせてくれたことに、感謝が尽きない。今度は始末依頼なんかじゃなく、喫茶店の客として。いや、友人としてまた来ようと思う。本当にありがとう」

たった三人の拍手だったが、俺の中では最高の拍手だった。

「では、そろそろ私も最後の仕事をしましょうか」

そう言うと、書類を数枚バッグから取り出した。さっきから持ってたのはそれか。

「これは今回の発端であるブツと呼ばれた機密書類です」

渡されたそれには、豚肉十tだのワイン千本だのの納品書が書かれていた。

「これが・・・例の？」

「ええ。それは暗号化されています。もう一枚が解読したものです」

「・・・・・・・・これは！」

二枚目を見ると、驚くことにそこには武器弾薬や兵器の密輸の納品が書かれていた。

「これが・・・本当のブツ？」

「はい。それがあなたの持ち物に混ざっていました。恐らく手違いで送られたのでしょう」

「しかし、よくこれが例のものだって分かったな」

「よーく見れば、おかしな点があるんですよ」

なるほど、俺では分からないはずだ。

「でも、本当に俺のところに本物があつた……。それも手違いで。なのになんであんなまどろっこしいことを？」

「恐らくは手違いということですよ。ですから、相手も本物が本当にあなたのところにあるのか確認はなかったわけですね。下手に動けば他の組織に勘繰られますし、もしあなたを消してしまったら、放っておいても問題のない裏切り者を今更消すと怪しまれる可能性が高い。そしたら全ての計画が水の泡だと思ったんでしょう。どうやら余程慎重な組織だったようです」

「そうだったのか……。前から思ってたけど、なんか間抜けな組織だな」

「ふふ、そうですね。では最後に、この依頼された『機密書類』を始末しますが、よろしいですか？」

「ああ、頼む」

白がやってきて、ライターで火を点ける。

武器弾薬、兵器の密輸の証拠書類が、一気に燃え上がり、消し炭となって空へと飛んでいった。

「始末、完了です」

そして、葉月はいつもの笑顔で微笑んだ。

Epilogue.

「葉一さま」

「ん？ なあに？」

週に一度の喫茶店の休日、葉一は自宅のソファでくつろいでいた。

「本当に、これでよろしかったのですか？」

「どういうこと？」

「あの依頼人に本当のことを言わなくて、よろしかったのですか？」

「いいの。あの人の依頼は『ブツを始末してくれ』という依頼だったし。それがダメな場合に備えての追加依頼も受けてたけど、それについては情報の開示の要求も最後までなかったし」

「……また、お優しい癖、ですか」

「……………それ嫌いだからやめて」

初めて、葉一から明らかに嫌悪がこもった言葉が出た。

「全く、始末屋としての義務をお忘れですか？」

「知ってるよ。『依頼された始末以外をすべからず』でしょ」

「そうです。何十年も代々受け継がれてきたこの非情とも受け取れる教えの一つが表と裏の均衡を保つ秘訣。あなたは『追加依頼を正式に受けていない』。確かにそれでは情報の開示もしようがありません。ですが、『何を始末したのか』ということは開示しなければなりません。あなたは、依頼人を嘘で守った。本来相手にするべきでない組織まで手を回したのですから。裏の世界が動きますよ」

「分かってるよ。……でも、私は後悔していない」

「ええ、あなたは『人間として』、道徳としては正しいことなさいました。しかし——」

「『始末屋としては失格だ』って言うんでしょ」

「はい」

始末屋を受け継いでから日は浅いが、裏の世界では初心者です。というのは通用しない。

力や知ある者が裏の世界を制する。そこには暗黙のルールこそあるものの、マナーなんてものはない。

始末屋を開業せよと命じられた初代葉月は、命を扱う職に就いていた。だからこそ、あえて敵

しい枷と掟を自らのみならず、葉月家に課した。始末するだけの心無いカラクリではなく、人間として、人として、代々続くであろうこの辛い裏家業で生きていくために。

当時の命令は国からのもので、葉月も一介の市民に過ぎず、逆らえるものではなかったが、現在はいつでも辞められる。なのに葉月がわざわざ受け継いだのは、なにより父親のためでもあった。

どこにいても知れない父親を探すには、同じ裏である始末屋を受け継ぐのが一番だと思ったからだ。行方不明ではあるが、死の報せはない。つまり、希望がある。

それまでは、どんなに苦しくても、辛くても、始末屋を続ける。そう、決意した。

「このままでは、お父さまに合わせる顔がありませんよ」

「大丈夫だよ。今は国も関係ない。私は私のやり方で始末屋をやり遂げる」

「・・・はあ。分かりました。最後まで、見届けましょう」

頑固な主に、白は折れた。

「分かったら、お茶の準備して。金も呼んで、三人でまったりしよう」

「かしこまりました。葉一さま」

白はお茶の準備をして、金を呼びに行った。

丁度その時、電話が鳴った。

「誰だろう」

プルルルル

「はい、葉月です」

「葉一？ 私よ」

「ああ、ミーナさん。今回はありがとうございます」

「いいのよ、葉一のためならこれぐらい朝飯前よ」

「それで、例の組織はどうなりました？」

「あの『機密書類』をちらつかせたら、一発で黙ったわ」

可笑しくて仕方がないのか、電話の向こうでミーナと呼ばれた女が笑いをこらえていた。

「そうですか、圧力は上手くかかったんですね」

「ええ。もうあいつらの企みは水の泡になったわ。連中は保身が一番だからね、ある意味喜んで圧力を受けたわ。逮捕はされないから、ご要望通りニュースには出ないわよ」

「ありがとうございます。それでは、お礼はまたいつか」

「うん、今度そっちに行った時よろしく」

電話を切ると、同時に白と金がやってきた。

「お茶の時間と聞いて飛んできました」

「うん、じゃあお茶にしようか」

世界は、良くも悪くも、表と裏で回っている。

そして今日もまた、いつもの日常と、非日常的な現実が繰り返される。

あとがき

始末屋を読んで頂き、ありがとうございます。

概要にも書いてある通り、前回と今回の始末屋は応募したものの没となり、ずっと封印されていたものです。それが今回、パブーさんを知り、小説を書くにあたって、失敗であり出発点となったこの作品を全ての人に公開しよう。そう思い、ほんの少し加筆修正をして公開しました。（設定や世界観などはそのままです）

そして、PDFやePubのダウンロードなど、数多くの閲覧をして下さっている読者のみなさまには、感謝とお礼を申し上げます。この二作品は、これからも無料公開してしますので、今後もよろしくお祈いします。

ご協力頂いた絵師である「搗瑠らいる」さんには、この場を借りて、改めてお礼を申し上げます。概要にpixivへのリンクを貼らせて頂いたので、是非見てください。これからもよろしくお祈いします。

さて、今回喫茶店を経営しながら裏で始末屋を本業に活躍する作品を公開したわけですが、実は設定を少し変えてみようとして今まで構成などを再構築していました。

・現代では始末屋は国から切り捨てられている。という設定を『今でも国が運営している』という設定に。

・葉月葉一は喫茶店を経営している。という設定を『普通の学生として高校に通っている』という設定に。

等々、根本から変更してみました。

ただ、前身であるこの二作品を完全に切り捨てるのはさすがにもったいない。ということで、全てではありませんが、一部を残す。もしくは少し手を入れて、より良いものにしてから次回に引き継ごうと考えています。

そして、今プロットが徐々に出来上がっている作品を、今度はリアルタイムで1P、1P書いて公開していこうと考えています。テーマは夏休み。これからの季節にぴったりの、ワクワクするような作品にしたいと思います。

更新などはTwitterを主に、ブログでも発信しています。

それでは、また次回作でお会いしましょう。

月宮悠

始末屋 2

<http://p.booklog.jp/book/26381>

著者：月宮悠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/magica-317/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26381>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26381>